
Zoom を用いた PCAGIP：その実施と有効性の検討

PCAGIP on Zoom: An Examination of its Application and Effects

岡本和磨・池田陽子・甲斐朱莉・末元真子
水谷晴香・米田紗菜・池見 陽
関西大学大学院心理学研究科心理臨床学専攻

Kazuma OKAMOTO, Yoko IKEDA, Akari KAI, Mako SUEMOTO
Haruka MIZUTANI, Sana YONEDA, Akira IKEMI
Graduate School of Professional Clinical Psychology, Kansai University

◆要約◆

PCAGIP とは、メンバー間の相互作用を通じて事例提供者に役立つ新しい取り組みの方向や具
体策のヒントを見出すためのグループ体験であり（村山・中田，2012）、様々な分野で活用されて
いる。しかし昨今の世界的な感染症の流行に伴い、オンライン上で行うなど方法上の工夫が求め
られている。そこで、本論文では Zoom を使用して PCAGIP を実践し、オンライン上で行うこと
のメリット・デメリットについて検討した。また、事例提供者にとってどのような応答が役に
立っていたのかについても検討を行った。実施の結果メリットとして、随時全員の表情を画面上
で真正面から捉えることが出来るため、対面にはない臨場感のある体験が可能であることが挙げ
られた。デメリットとしてセキュリティの脆弱性に対する 5 つの不安が挙げられた。しかし、
Zoom のアップデートによりそれらの不安のほとんどが解消されているのではないかと考えられた。
また、PCAGIP において役立つ応答を検討した結果、メタファー表現による自己理解の生成過程、
及びメタファー表現との交差やメタファーを用いた相互の追体験が重要であると考えられた。

キーワード：PCAGIP、Zoom、メタファー、追体験

Abstract

According to Murayama and Nakata (2012), PCAGIP is a group experience involving the
interaction between members in order to generate new understandings and perspectives toward
engaging the client that is presented by the presenter. With the surge of the worldwide pan-
demic, methods of holding PCAGIP groups online need to be innovated. In this article, the
authors examined the merits and demerits of holding a PCAGIP group online using Zoom. In
addition, the article investigated what kinds of interactions were useful for the presenter. One of
the merits of Zoom was that the facial expressions of the presenter was clearly visible to all par-
ticipants, and this enhanced group cohesion. As for demerits, five security risks frequently cited

with regards to Zoom were outlined. These security risks, however, seem to have diminished with updates. As for the interactions that the presenter found useful, the presenter reported that metaphors contributed to the emergence of self-understanding. Along with metaphorical expressions, “crossing” with metaphors, as well as mutual Re-experiencing (Nacherleben) through the use of metaphors were highlighted as aspects of helpful interactions.

Key Words: PCAGIP, Zoom, Metaphors, Re-experiencing

I. はじめに

1. 問題と目的

PCAGIP とは、「事例提供者が簡単な事例資料を提供し、ファシリテーターと参加者が安全な雰囲気の中で、その相互作用を通じて参加者の力を最大限に引き出し、参加者の知恵と経験から、事例提供者に役立つ新しい取り組みの方向や具体策のヒントを見出していくプロセスをともにするグループ体験である（村山・中田, 2012, p.12)」。この PCAGIP は村山・中田 (2012) では、教育や産業、心理臨床のケースカンファレンスなど様々な分野で活用されている。また、フォーカシング指向 PCAGIP (佐藤, 2013) や夢 PCAGIP (筒井, 2015) のような PCAGIP を応用したグループワークも報告されている。このように PCAGIP の実践の広がりには明らかであるが、これらは同じ空間に集まり、参加者が対面する形で行われている。世界的な感染症の流行を契機に、PCAGIP をオンライン上で行うなど方法の工夫が講じられているものの、我々が調べた範囲ではオンライン上で行われた報告例はない。そこで、我々はオンライン上のミーティングアプリケーションである Zoom を使用して、PCAGIP を実践した。そして本論文では、まず PCAGIP をオンライン上で行うことのメリット・デメリットについて検討する。また、事例提供者にとってどのような応答が役に立っていたのかについても検討する。

2. PCAGIP (対面) の構成と実施手順

村山・中田 (2012) による PCAGIP の構成は

以下の通りである。グループはファシリテーター 1 人、記録者 2 人、事例提供者 1 人、参加者 8 人程度で構成する。情報の可視化と共有のために黒板 (ホワイトボード) を 2 枚用意し、全員が黒板 (ホワイトボード) を見えるように円陣をつくる。また、ファシリテーターは場面構成としてグループ全体に①事例提供者を被告にしない、批判しないこと②記録をとらないことを約束事として伝える。時間構成は一つの事例に対し 90 ~ 120 分を要すると想定されているが、明確な決まりはない。次に PCAGIP の手順を述べる。事例提供者は全員に事例資料を配り、それを参照しながら事例について説明する。その後、参加者は事例提供者と事例の状況を理解するために質問していく。質問は原則一問とし、一人ずつ順番を決めて発言していく。その際、記録者が黒板 (ホワイトボード) に記録する。クロージングでは、事例提供者と事例をめぐる状況の全体図 (「ピカ支援ネット図」) を全員で共有しながら、事例提供者に PCAGIP 体験プロセスの感想を述べてもらう機会をつくる。そして事例提供者、記録者、参加者全員に感謝し終了となる。

II. PCAGIP (Zoom) の構成と実施手順

1. 参加者

本研究のメンバーは 7 名 (男性 2 名、女性 5 名) であった。そのうち 6 名は Zoom を用いた PCAGIP に一度参加した経験があり、他の 1 名は Zoom での PCAGIP への参加は初めてであった。なお、対面での PCAGIP には全員参加した

経験があった。

本セッションは記録者1名、「話題」提供者1名、ファシリテーター1名、参加者4名の構成で行った。また、順に質問を行う場面ではファシリテーターも参加者として質問を行った。記録者は基本的には記録に専念することとしたが、内容理解のための質問は必要に応じて行った。加えて、記録者はセッションの時間管理も行った。

2. アプリケーション

本研究にはオンライン上のミーティング・アプリケーションであるZoomを用い、メンバーの同意のもとセッションの録画および記録を行った。記録にはワープロアプリケーションであるPagesを用い、Zoomの画面共有機能で話題提供者および参加者と共有した。そのため、参加者がそれぞれに記録やメモを取ることは禁止した。画面上にはメンバーの全員の顔とメモの両方が表示されるよう操作した。なお、セッション中はできるだけマイクをミュートしないようにした。これは参加者の感嘆など生の声が聞こえることで「今ここ」の状況をリアルに表現することができるという考えからであった。

質問が思いつかなかったときのためにいくつかの質問文を用意して、あらかじめ配布しておいた。

3. 手続き

本セッションにおいて、臨床事例を扱うにはZoomのセキュリティ面に不安があったため、臨床事例ではなく「話題」提供者自身の気がかりを扱った。セッションは話題提供者が満足するまで参加者からの質問を何巡でも続けることとしたが、時間制限として60分を限度と定めた。また、話題提供者を中心に、参加者全員が主体的にワークに取り組み、話題提供者に多様な視点を提供する機会となるように心がけた。結論は必ずしも出す必要はなく、むしろメンバーは相互作用を大切にするという姿勢で臨んだ。

セッションの事前準備として、話題提供者と記録者を決め、参加者の質問順を決めた。質問順は画面上に表示されるそれぞれの名前欄に表記した。

セッションを始めるにあたり、ファシリテーターから①話題提供者の語りを聴くこと、②話題提供者の語りに対して批判的な態度を取らないこと、③ワークの中で話されたことはその場限りのこととし、他の場所で話さないことが注意事項として告げられた。上記の注意事項が守られず安全性が保てないと考えられる場合や、ワークの方向性から外れる可能性がある場合は、ファシリテーターが介入することとした。

セッションは、話題提供者に気になっている状況を語ってもらい、そのことについて参加者が順に質問をする形で進めた。また、質問と合わせて、話題提供者の語りを聴いて参加者自身が感じていることを伝えても良いこととした。なお、質問に対する話題提供者の語りは、話題提供者自身が「はい」という合図で区切りを示すこととした。本セッションでは質問が4巡したところで60分が経過したため、質問を止めてクロージングに移った。クロージングでは話題提供者に今感じていることを尋ね、参加者それぞれで感謝の気持ちを持ってセッションを終了とした。

Ⅲ. 役に立った応答の検討方法

Zoomを利用したPCAGIPを実施した2日後に、振り返りの時間を90分設け、そのうち30分でどのような応答が役に立ったかを検討した。そのために、当日Pagesに書き込んだ記録を話題提供者が見ながら、どのような応答が役に立ったかを振り返った。次に、Zoomの録画をもとに、役に立ったところの逐語記録を作成し、次の週に再び振り返りを行い全員で確認した。

IV. 結果

1. PCAGIP (Zoom) のメリットとデメリット

Zoom を利用したPCAGIP のメリット・デメリットは表1に示す。中でも筆者らが特に感じたメリットは、全員の表情の変化がわかりやすい点であった。対面で行うPCAGIPの場合、グループ内で隣に座った人、もしくは距離が離れている人の表情がわかりにくく、曖昧な理解となりやすい。一方、Zoom を利用したPCAGIPの場合は、随時全員の表情を画面上で真正面から捉えることが出来るため、対面にはない臨場感のある体験が可能となった。デメリットとしては、マイクをオンのままセッションを行うことで生活音が混入することが挙げられた。実施上、大きな問題ではなかったが、今後は参加者が自由にマイクのオン・オフを切り替えるようにすることが望ましいと思われた。

2. 役に立った応答

Zoom を利用したPCAGIP 後の振り返りで話

題提供者が重要であったと取り上げた箇所は2巡目（以下、R2）全体と4巡目（以下、R4）の一部であった。以下にセッションの概要と逐語記録を記載している。なお、A～Eは各参加者、Zは話題提供者、Zの後ろの数字はそのラウンド（以下、R）で何回目の発言であるかを示している。

(1) R2 の逐語記録

話題提供者は、とある事情から急遽いつも以上の負担を背負わなければならなくなった。それは誰のせいで起きたことでもなく、避けることが難しい仕方のないことであった。しかし、どこか割り切れなさを感じてもいた。R1では、そのような心境にありながらも事態を前向きに捉えようとしていること、しかしそのためのエネルギーが不足していることなどが話された。R1の最後に、休日にからだを休めていても常になにかに追い立てられているよう感じがあると話し、以下、R2へと続いている。

表1 PCAGIP (Zoom) のメリットとデメリット

メリット	<ul style="list-style-type: none"> メンバーとの物理的な距離がどれだけ離れていてもセッションが可能 セッションの開始時間の自由度が高い 自分が話しやすい環境を選んで参加できる 全員の顔が満遍なく見える その場の雰囲気による圧がない 録画がしやすく、表情まではっきり映る リアルタイムで記録が共有されることで自分では思いつかない捉え方が見えたり、自分の聞いたことの確認ができる 情報量に合わせてメモ用紙のサイズを変えることができる 他者の乱入がない 自分自身の表情を見ることができる
デメリット	<ul style="list-style-type: none"> セッション直後の交流の機会が少なく自由な感想や長時間の振り返りが難しい 自宅やZoomの使える場所に話しやすい環境を作るのが難しい場合がある 直に関わっている感じが薄い 画面上に映る部分が限られている 発言のタイミングをはかりづらい マイクが拾ってしまうことを心配して、自然な反応を抑えてしまう マイクをずっとオンにしておくことにプレッシャーを感じる 電波の影響を受ける 生活音が入りすぎる セキュリティの脆弱性

- A： さっき常になにかに追い立てられてるとおっしゃっていたんですけど、なんかそれからだで感じてみると、どんな感じがするのかなって気になったので、教えてください。
- Z1： はい…（沈黙：20秒）なんか固くなる。なりますね。からだが。なんかうまく動かない感じ。錆びちゃった機械みたいな。うーん、錆びてるので動かないんですよ、たぶん。動いてくれなくて、うまくコントロールできない、感じ…（沈黙：10秒）じゃあなんで動いているんでしょうね。うーん…（沈黙：15秒）なんかこんなこと言ってるけど、たぶん、身体症状としてなにかが出るわけではないし、行けないわけではないし、なんとかやるうとは思ってるんですけど。それはわたしが動かしてるわけではないなあ。はい。
- B： いま、なんか、わたしが動かしてる感じじゃないとおっしゃったと思うんですけど、なんかそれってどういう感じか、もう少し詳しくお話し頂いてもいいですか。
- Z2： …（沈黙：15秒）なんかイメージとしては、なんかピタゴラスイッチみたいな感じで、なんかその、あの球って、自分で動いてるわけじゃなくて、ペッてされたらなんか勝手に状況に流される感じで動いてると思うんですけど、あんな感じです。球が動くうと思って動いてるんじゃなくて、あれは、坂道だから転がるし、障害物があるからはねるし、みたいな。感じで、うん、私が動かしてる感じじゃないってのはそんな感じがします。勝手に、うんー、動かざるを得ない状況というか、そこに私の意志が無い、感じがします。はい。
- C： えと、お話聞いてて、なんかその、Zさんはその球って感じ？なんですかね？（Z： そうですね。）その球になってるZさんはなんかどんなふうに思ってるのかなあって。
- Z3： 一旦落ち着きたい、止まりたいんですよ、一旦止まりたくて、一旦確認したいというか。うんー、止まりたいですね。でも、そんな止まる暇がなくて、転がることしかできない。坂道を球体で止まろうと思ったら、それこそエネルギーがいるし、ものすごいエネルギーが必要、でもわたしにはその摩擦力もない。うん、そんな感じです。
- D： はい、ちょっと自分が思ったことで、最初ピタゴラスイッチって聞いて、僕らってテレビで見てる時って上から見てるから、どんな仕掛けをどんなふうに施されてるか、僕らは把握できるけれど。球であるZさんは、それを把握できないし、坂道だし、障害物によって転がされてるし、しかも摩擦力が足りないんだなあっていうふうに思っていました。
- Z4： そうですね、ほんまにそんな感じやと思います。（この後、Zは自分の状況とピタゴラスイッチというイメージの重なりについて、堰を切ったように話し始めた。元々自分が想定していた1年間のスケジュールが全く別物になったため負担が増えてしんどい思いがあるが、経験をたくさん積む機会を得ているという恵まれた状況に感謝しなければならないという思いもある。また、自分のコントロール外でスケジュールが変更になったような感じがあり、ピタゴラスイッチの球には障害物が見えていない状況とまさに一緒だと話した。以上、感情を交えながら約5分間に渡る長い語りであった。）
- E： なんかお話を伺ってて、すごく想定外の道を走っていたり、すごく障害物が増えるような、そんなイメージが伝わってきたんですけども、うんー、もしその球に何かを伝えるとしたら、どんなことを伝えたいですか？
- Z5： …（沈黙：20秒）なんか2個うかんでて。…（沈黙：5秒）心の底から、なにもほかのことを考えなくていいなら、休んでいいよって言ってあげたいんですよ。…（沈黙：5

秒)でもそれはできないんで、っていう思いがすぐうかんできて、そうだったら、あとちょっとだよみたいな励まし、ゴールはもうすぐだから。うん、でもなんか、こうやって思って、何回も思ってた、もう大丈夫だよ、もうすぐだよとか。でもそれがことごとく大丈夫じゃなくなっちゃたり、終わらなくなったりしてるから、あんまり信じれないですね。うんー…(沈黙：10秒)、はい、そんな感じです。

(2) R4の逐語記録

R3とR4の冒頭では、R2で話された「ピタゴラスイッチの球」についての話が展開した。その中で話題提供者は、転がれなくなるのではないかという不安を語った。

B：すごく、今おっしゃってくださったみたい
に転がれなくなったら、どうしようみたいな
感じを…なんか…(沈黙：10秒)こうな
ったらいのにみたいな、ところも、ちょ
っと考えるのが、怖、くなってきたのかな
っていう感じにも、感じて、私には感じて、
いながら、お話を聞いてました。(Z：うん
…(沈黙：5秒)なんか…)もし、しんどか
ったらやめてくださって、しなくて大丈夫
なんですけど、なんかその、不安な感じ、
っていうのを感じてみたときに、浮かんで
くるイメージと違って、あったりしますか。

Z1：…(沈黙：35秒)なんか、暗闇の中に独り
ぼっちみたいな。…(沈黙：10秒)何も見
えないし…(沈黙：7秒)感じれないし…上
も下も右も左もわからない…感じですかね。

C：…(沈黙：15秒)なんか、たぶん私はよく
…Zちゃんのお話聞いているからセッション
だけじゃなくてそれまでのことっていう
のを色々、思い返してたりもしてたんやけど…
暗闇の中に独りぼっちやったら、寂しいし…
苦しいし切ないやろなーって思ってた今。
なんか明かりが欲しいなって…すご

く思ったり、してて。…なんか…うん…う
ん…なんか…明かりが欲しいなって、思っ
た。

Z2：…(沈黙：13秒)たぶん、明かりはあると
思う。それは…(沈黙：10秒)それは…(沈
黙：7秒)同期のみんなやし…(この後、Z
はCの発言した明かりという言葉がCを連
想させることから、Cの存在が強く意識さ
れたと話した。また、CとZは授業が一緒
であることが多いため、他の同期に話して
いるよりも多くのことを共有していると語
った。)明かりは、たくさんあって、それは
同期のみんなだけけど…私にとってCちゃん
の存在は、大きいなって…思いました。

(3) 話題提供者から振り返ったセッションの感想

本論の目的のひとつは話題提供者にとってど
のような応答が役に立ったかを検討すること
にあった。そこで、Zoomを利用したPCAGIPを
実施後に行った振り返りにて話題提供者が語
った感想と山場だと感じられた2箇所につい
て考えたことを以下に記した。

全体を通して、参加者が話題提供者の考
えていること、話すことを分かろうとして
くれる空気感を好ましく思った。参加者
が寄り添ってくれる雰囲気があったた
め、自分の感じていることを説明する、
というよりは思うがまま話せた。分か
つてもらうために話さなくても、参加
者は話題提供者の言いたいことを理
解してくれているような感じがあ
った。また、参加者一人一人と話
すというよりは、話したことを取り
入れて流れが展開していくように
感じた。

また、セッションの山場は2箇所あ
ったと感じた。R2では、Z2で「ピ
タゴラスイッチみたいな感じ」と話
したが、Z1の段階では「錆びち
ゃった機械みたいな」とのとおり、
機械のようなものをイメージして
いた。しかし、もう一度吟味しな
おすと浮かんできたイメージは「
ピタゴラスイッチ」で、この段階
では自分でもなぜ「ピタゴラス
イッチ」なのかが分かっていなか
つ

た。だが、Dで球自身はどのような仕掛けがあるか見えないし分からないんだなと思ったことを言われ、「ピタゴラスイッチ」が自分の中にぴったりはまった。球の質感や色など、イメージがふわっと広がった瞬間であった。

Cは普段からZと話す機会が多く、このセッションで取り上げた内容についても相談していた。R4での「明かり」とC自身がリンクしていたことや、普段からの関係性の影響もあり、自分は暗闇に1人ぼっちじゃないということに気づけた瞬間が2箇所目の山場であった。温かいものに包まれたような感覚があり、思わず涙が出た。

V. 考察

本論の目的は2つあった。それらは、Zoomを用いたPCAGIPの可能性について検討することとZoom、対面を問わずPCAGIPにおいて、話題提供者が「役に立つ」と感じる応答はどのようなものかを検討することであった。これらについて以下に考察していく。

1. Zoom 利用について

オンライン上のミーティングアプリケーションであるZoomを利用したPCAGIPについては、結果で報告している通り、支障なく実施することができた。表1に示したメリット・デメリットについても結果で報告した通りである。これらの中でデメリットとメリットをそれぞれ1つ取り上げて論じてみたい。デメリットの中で「セキュリティの脆弱性」は特に気になる場所であったため、本論でも臨床事例については取り上げないことと決めていた。しかし、そもそもZoomにはいったいどのような脆弱性の問題があるのだろうか。

Zoomのセキュリティの脆弱性についてはインターネット検索すると多くのウェブサイトがこの点を解説していることがわかる。その中でも、比較的わかりやすいサイトをひとつ選び、

その要点を示す。なお、この問題をより正確に理解するためには、他のサイトと読み比べる必要もあろうが、本論はITの専門論文ではなく、ユーザーとして気になる点を検討する立場にあるため、この視点で解説されている「NEC ネットエスアイ」のサイトに限定して取り上げる。結論から先に言うと、Zoomには5つのセキュリティの脆弱性があったが、それらは2020年3月～5月の度重なるアップデートによって改善されている。今後の課題はZoom自体のセキュリティの脆弱性ではなく、ユーザー側の意識であると結論されているように読める。

Zoomにあった5つのセキュリティの脆弱性とは次のものである。①FacebookにZoomを利用した端末情報が送信されていたこと。これについてはFacebook社の通信プログラムが削除されたことによって対応済である。②認証情報が盗まれるケースがWindows利用者から報告されていた。これは実はWindowsに入り込んだマルウェアが原因であったが、Zoom側でもこの問題を2020年3月のアップデートで解決している。③Zoomが利用している暗号化システムに脆弱性があることが指摘されていたが、2020年4月のアップデートで最新の暗号化に変更することにより、この問題は解消している。④Zoom Bombingと言われる現象で、Zoom会議の参加者でない人が乱入する、といった問題である。これについてはZoomでは「待合室」機能を追加して、会議室への入室を許可性によって改善している。そもそもこの問題はMeeting IDやパスワードをSNS上にアップロードして公開していたために発生していたものと考えられており、Zoom特有の問題ではなく、どんなアプリケーションでも、IDやパスワードの管理には注意しなければ同様の問題が発生するだろう。⑤ホストが資料提示を行った際、参加者が30秒以上席を離れた場合、ホスト側に通知が行く機能があり、それが「プライバシーの侵害」だと受け止められる場合があったそうである。この機能がどのように改善された

のかは、NEC ネットズエスアイは詳細に触れていないが、この問題について過去形で書かれている点と、実際にこのような事象に遭遇したことがないことから、これは改善済みと考えてもいいのではないだろうか。

以上のように、Zoom のセキュリティの脆弱性の問題は現在ほとんど対応済みであると考えていいだろう。むしろ、ユーザー側の問題として、ID やパスワードの管理に注意することや、常にアップデートしておくことなど、基本的なインターネット・エチケットが重要であろう。

反対に、Zoom のメリットで注目すべきことは、仮想空間で人々が交流することができる点であろう。つまり、わざわざ PCAGIP を行う「場所」に行かなくても、自宅から PCAGIP に参加することができる、というメリットである。最近、Zoom を利用したワークショップ等が急増している。参加者が地域や国に限定されず、近いタイムゾーンから参加するようになってきている。つまり、例えば「大阪〇〇研究会」には、従来ならば大阪と近郊の参加者が参加していたが、Zoom を利用するようになって、その会に北海道、東北や沖縄だけではなく、オーストラリア、タイ、香港、台湾、中国などの海外の参加者も参加するようになってきた。また、次のような変化も起こってきている。これまで、「大阪〇〇研究会」と同様の内容を、今度は東京近郊の参加者を対象に、「東京〇〇研究会」でも「レポート」してきたのに、その必要性がなくなってしまったのである。なぜならば、「東京〇〇研究会」を行ったとしても、参加者は「大阪〇〇研究会」と同じワールドワイドな顔ぶれになるからである。インターネットの活用によって、PCAGIP に限らず、いろいろな心理的な方法を「地方に広める」必要がなくなってきた。このようなワークショップ等の運営上の変化がすでに起こっていることを考慮すると、Zoom を利用した PCAGIP などの心理学的ワークはコロナ禍の一時的なものではなくなっている実情が見受けられよう。

2. 話題提供者の役に立った応答

話題提供者が結果に書いている通り、「山場は2箇所あった」。そのひとつは「ピタゴラススイッチ」、もうひとつは「明かり」の登場であった。筆者らは、この2箇所がどちらもメタファーであることに注目している。池見 (2019) によると、人の体験はそもそも言葉や概念によって構成されていない。そこで、ある状況下で話題提供者が何を体験していたのかを言葉にすることは容易いことではない。言葉や概念として体験を表現することは困難であったとしても、それをメタファーとして表現することはできる。最初の「山場」では「ピタゴラススイッチ」のメタファーが表現されることによって、自分がいったい何を体験しているのかといった自己理解が促進されている。池見 (2019) は哲学者デイルタイやジェンドリンを援用しながら解釈学的循環を解説している。それは体験・表現・理解の循環である。話題提供者 Z は自身が「体験」している生 (せい) の感覚を「ピタゴラススイッチ」というメタファーを利用して「表現」したとき、自分の生はピタゴラススイッチを走る玉のようだと「理解」が生起したのである。Gendlin (1997, p.41) を援用すると、Z が表出させた「ピタゴラススイッチ」というメタファーは、Z の体験そのものであり、同時にそれは表現であり、同時にそれは理解である。体験、表現、理解のどれをとっても、それは、それ以外の2つの実例となるのである。

そもそもジェンドリンの概念である crossing (交差) について、Ikemi (2017) は2種の交差が *A Process Model* 以前のジェンドリン文献に見られるとしている。ひとつは「掛け合わせ」を意味する交差である。つまり、突如として浮かんだ「ピタゴラススイッチ」は「Z の最近の生きざま」と掛け合わされていた。これは岡村 (2017) が論じているように、3段なぞかけと同様の体験的作用がある。「ピタゴラススイッチとカケて、最近の私の生きざまとトク、そのココロは？」R2 の Z4 は「そのココロ」を説いている

ようにも読める。

Ikemi (2017) では交差は「追体験」をも意味していることが記されている。以下のC4の発言は正に、CによるZの体験の追体験であると読める。「思い返してたりもしてたんやけど…暗闇の中に独りぼっちやったら、寂しいし…苦しいし切ないやろなーって思ってた今。なんか明かりが欲しいなって…すごく思ったり、してて。…なんか…うん…うん…なんか…明かりが欲しいなって、思った。」ここが山場であるとZが感じたことは、CによるZの体験の追体験が役に立っていることを物語っている。

ときに追体験としての交差と「掛け合わせ」としての交差は「シームレス」に繋ぎ合わさっていることがIkemi (2017) に論じられている。つまり、暗闇の中に明かりがほしい、という追体験と、アカリがC自身を連想させるというように、「明かり」とC自身が掛け合わされているのである。さらに、これは「暗闇の中の明かり」というCの追体験において生じたメタファーであるから、掛け合わせと追体験の両方の意味をもつ「明かり」がCによって表出されたことがZの役に立った。

VI. まとめ

本論を通してZoomを利用したPCAGIPには将来性があるように思われた。また、PCAGIPにおいて役立つ応答を検討した結果、メタファー表現による自己理解の生成過程、及びメタファー表現との交差や参加者との間で追体験され、すでに交差されているメタファーによる相互の追体験が重要であると考えられた。筆者らが調べた範囲ではこれらについては、先行研究では論究されておらず、どちらの点についてもさらに検討を加え、新しい視点としてPCAGIP研究に寄与することができれば幸いである。

文 献

- Gendlin, E.T.(1997) : How philosophy cannot appeal to experience and how it can. In Levin, D. (ed) *Language Beyond Postmodernism: Saying and Thinking in Gendlin's Philosophy*. Evanston, Northwestern University Press. pp.3-41.
- Ikemi, A.(2017): The Radical Impact of Experiencing on Psychotherapy Theory: An Examination of Two Kinds of Crossings. *Person-Centered & Experiential Psychotherapies* 16(2) : 159-172.
- 池見 陽 (2019) : 表現のセンスとギヴスの創造的な出会い—体験過程とアートの相互作用をめぐって『臨床描画研究』34 : 64-85.
- 村山正治・中田行重 (編) : (2012) 『新しい事例検討法 PCAGIP 入門 : パーソン・センタード・アプローチの視点から』 創元社
- NEC ネットズエスアイ : 「Zoom」のセキュリティ・脆弱性とは? ウェブ会議に使っても大丈夫? <https://symphonict.nesic.co.jp/workingstyle/zoom/security-weekness/> 2021/1/5 閲覧
- 岡村心平 (2017) : 交差と創造性—新たな理解を生み出す思考方法—『人間性心理学研究』35(1) : 89-100.
- 佐藤彩有里 (2013) : フォーカシング指向PCAGIP—学校現場での実践から 日笠摩子・堀尾直美・高瀬健一・小坂淑子 (編) 村山正治 (監修) 『フォーカシングはみんなのもの : コミュニティが元気になる31の方法』 創元社 pp.118-121.
- 筒井優介 (2015) : 夢PCAGIPの試み—グループにおける相互作用の活用 『関西大学心理専門職大学院紀要』5 : 73-81.

